

十勝毎日新聞

発行所
 十勝毎日新聞社
 ©十勝毎日新聞社 2004
 〒080-8688
 帯広市東1条南8丁目
 TEL(代表)0155-22-2121
 編集局 0155-22-2121
 広告局 0155-23-2323
 販売局 0155-24-2222
 事業局 0155-22-7555
 総務局 0155-24-2299
 広尾支局 01558-2-4111
 池田支局 01557-2-2367
 本別支局 01562-2-2618
 新得支局 01566-4-5524
 札幌支社 011-261-2161
 東京支社 03-3544-1365

三角翼機回収に成功

大 樹

北大、道工大 グループ 無線操縦で軟着陸

【大樹】北大と道工大の研究グループは14日、大樹町の多目的航空公園付近で、推進剤に固体燃料(アクリル)と酸化剤(液体酸素)を組み合わせたハイブリッドロケットCAMUI(カムイ)を打ち上げた。3回目の実験となる今年は、従来型の筒型機体に三角形の大きなデルタ翼を搭載し、回収時の誘導用を利用した。高度1500メートルに到達した後、滑空、旋回飛行をこなし、データの収集に成功した。

同ロケットは液体、固体の各ロケットに比べて安全性が高く、低公害、低コストと注目を集めている。回収すれば再利用が可能なのも特徴。同グループは1998年、ハイブリッドロケットによる完全再使用打ち上げシステムの開発を始めた。最終的に①3分間ほどの微少重力環境の創造②気象観測での利用③小型人工衛星の打ち上げなどを目指している。実験は2002年、03年に続き3回目。教授や学生約20人が参加。全長1・28メートルのロケット(重量15キログラム、推力60キログラム)にデルタ翼(縦1・28メートル、横1メートル)を装着。パラシュートを開く前に一定の場所へ誘導し、回収を容易にすることが狙い。

午後4時ごろに「ゴー」という音とともに打ち上げ。水平方向に移行した後、デルタ翼の下部の補助翼を無線で操縦。旋回させて目標地点に軟着陸させた。北大大学院の永田晴紀助教授は、発射姿勢や滑空、旋回飛行は完璧だったと話す。別の東海大学の学生グループも時期を合わせて初めて実験を行った。

13日には1機目の筒型ハイブリッドロケット(全長2・1メートル)を上空600メートルまで打ち上げ、600メートルまで打ち上げ、火薬で機体を分離させてパラシュートで回収。15日には2機目の発射を予定。火薬を使わない分離方法でパラシュートを開かせる。(浅井文人)



デルタ翼を搭載して打ち上げられるハイブリッドロケット(山下僚撮影)



無線操縦で旋回、着陸体勢に入るロケット(同)